ヴィニーの想像的空間（Ⅲ）
── Idéesをめぐって ──

向　井　邦　夫

序

ヴィニーは,『日記』の随所にIdées を提起することが詩人の使命だと書き，いくつかの詩篇でIdées を女神の如く崇めてはいるが，何処にもIdées の哲学的属性については語っていない。この沈黙は，彼のIdées の中味を我々に捉え難くしていると同時に，それが大へん幅広い内容を含んでいることを示している。

19世紀初頭の文学者が，具体的な事物や特殊な有様をそのまま模倣するよりは，それら相互の関係を模索し，事物を抽象化させた形，すなわち，idéeという形で提起することを好んだとすれば（哲学論や教訓詩），idéeは知的厳密さ，あるいは，合理主義嗜好を前提としている。idéeという語は科学的確実性を意味している。だが，実際，彼らが提起しようとしたidées は，時間の経過とともに序々に，客観的な論理に裏打ちされたものではなくなってくる。具象物よりも抽象的概念を志向することは肉体的快楽よりも精神的歓喜を嗜好することに繋がる結果，彼らは，idéeに，物質に対する精神という意味を持たせ，それを崇めるに至るのである。こうした価値観に基づく彼らのidées は，従って，物質を排除した自らが理想とする精神の世界そのものとなる。ところで，この理想の精神界を的確に捉え表現するためには，厳密さを旨とする知性は，空想なるものを奔放に駆使する精神主義者達の熱狂さに叶わない。天啓論と神秘学が普及する中で，彼らは象徴なるものを使い，世界の発見と表現に専心した。厳密さよりも巧みさを上位においた彼らは，論理を覆した。物事の本質に到達し調和し得ないものを結びつけるのに障害となるべきものは最早何もなくなった。

ヴィニーのIdées は，従って，合理主義と非合理主義の狭間で捉えられるべきものであろう。我々は，先ず，彼の世界観を時代の流行である天啓論と対照させて浮彫りにすることから始めたい。この対照は，つまるところ，象徴というものをめぐって為されるべき性質のものであろう。次に，我々は，合理主義のものである彼のIdées の中に意識的あるいは無意識的に含まれている非理性的な要素を，抽出し考察してみたい。知性に対する感性，客観に対する主観，一般性に対する特殊性こそ詩人たるものの存在価値を支えるべきものだと考えるからである。このようにして捉えられるヴィニーのIdées は，彼の現実と夢，彼自身の全てを示すことになるであろう。我々は，最後に，理性的なものと非理性的なも

のが彼の中でどのように絡み合うのかを考察したい。小論は，Idées を以上のような見通しのもとに考察することにより，ヴィニーの精神構造，あるいは，想像力地図を素描しようとするものである。

I

ヴィニーは終始デカルトを尊敬した。その哲学体系にではなくその合理的・実証的精神に共感を覚えた。彼は明確な概念や厳密な演繹を好み，非理性的なものを本能的に嫌った。確実な事実に基づいてものを考えることを好んだのである。『ダフネ』の中で彼は歴史の法則を探っているが，神の摂理を引き合いに出さず事実の自然な繋りを援用している。ユリアヌスの努力にもかかわらず，〈心の素朴さ〉（D.363）[1]を依然として有する蛮族を介してキリスト教が勝利を収めたのは，ローマ人が衰弱していたからであり，文明の当然の結果である詭弁的精神が勝ったまでのことである。ヴィニーが絶えず引き合いに出す「運命」という一見超自然的な観念にしても，彼はそれを性格の弱さや偶然の出来事の所為にしている。「運命」は〈絶えず人間を支配する怠惰な精神によって生み出される狂気〉（J.990）であり，〈事件の成り行きと呼ばれるものであり，目に見えざる潮の満干であって〉(J.1026)，決してジョゼフ・ド・メストルの考えるような「悪」の化肉ではない。信仰の領域においても彼は論理的であろうとする。神は無実の人を罰した，ゆえに不正である。神はその息子を見棄てた，ゆえに冷淡である。彼にとって〈理性こそがあらゆる信仰の根源たるべき〉（J.1234）なのである。

従って，ヴィニーの Idées は秘教からなる一切の形式とは一線を画している。神秘的な照応とは無縁である。如何なる場合においても，彼は天啓論の中に神の神秘に関する知識を求めたりはしない。確かに，彼にも神秘体験と目されるものはあった。初めての聖体拝領の儀式について，後年，彼は，聖体を拝領する瞬間がやってきた時，神御自身が自分の中に入ってこられるのだと考え強い戦慄を覚えた，と語っている。[2] この子供の頃の体験を彼はユリアヌスに投影させている。ニコメディアの教会で，ユリアヌスは〈はっきりと，確かに，晴々とした気持で神を見た〉(D.328) のである。だが，直接神を見，その懐に抱かれんとする神秘主義(mysticisme)は，考えるというよりはむしろ感じる範疇に属することである。これに対して，神秘学(occultisme)は，徴や照応という媒介を使って，実在の根源が存する背後の世界に入るために仮象を解きほぐそうとするのであるから，大へん知的な営みであると言わねばならない。目的は非論理的であり手段は論理的な営みである。とはいえ，ヴィニーの神秘主義は一時的なものであり，彼には四次元的世界への関心はない。事物の中に世界の魂が生きているという汎神論者のような考えはない。彼にとって，世界の中に生きて在るものは物質と魂との曖昧な配合物ではなくて，「精神」なのであり，「精神」が巧妙な道具方として舞台装置を動かしているのである。魂が物質を支配するように「精神」が世界を見下ろしているのである。

しかしながら，ヴィニーが好んであの世のことを夢想したことも事実である。だが，エロアの楽園は信仰に類するものではない。それはステロの願う〈未知なる天空〉(St.577) と同様，ヴィニー自身の詩的な夢想の世界である。彼が〈絶えず懇願する最上の世界〉(J.1221) であり，〈幸せなる領域〉(J.1227) である。〈女の天使なんかは存在しなかった〉(J.891) と彼が『日記』に書く通り，エロアはヴィニーが創り出した天使である。また，『ダフネ』におけるユリアヌスが奉ずるギリシアの神々にしても，ユリアヌスが熱狂的に信ずる新プラトン学派流の色彩の濃い神々でしかない。楽園は詩的夢想の外にはないのである。実際ヴィニーは神を信じない不信の輩である。1837年の『日記』には，人間の能力である知性を神格化しようとする計画が述べられ (J.1061), 1843年には，神よりも人間の方が偉大であるとする詩あるいは劇の構想が語られている (J.1206)。もし彼が神に関心を持つとすれば，それは我々の秘密の保持者としてのみである。なぜ人生は〈永遠の牢獄なのか〉(J. 993)。なぜ人間は〈人類の未来と過去を知らされていないのか〉(J.978)。こうした態度は『橄欖山』の中で父なる神に訊ねるイエスの口を通して明確に表現されている。

全てが明かされるだろう，人間が知ればどこから来てどこへ行くのかを
(V.129et130)

神の神秘や本質や属性にもともと興味のないヴィニーがこのように訝うとすれば，それは全く人間の謎にのみ関心があるからである。世界に意味を与えるのは神ではなくて人間である。『ダフネ』の中で，ノワール博士がキリスト教を擁護するのは，超自然界を扱う神学者の立場からではなくて，社会的要因あるいは倫理という人間的な立場からである。〈キリスト教の倫理は，政治生活や私生活に関する様々な国家の経験の要約であるがゆえに優れている。それを保持し，完成させよ。だが，超自然界については，来世については，決して考えるな，語ってはならない。無駄なことであり，精神の最も危険な傾きである〉(J.1377)。このようにして，理性の光を信じるヴィニーは，伝統的神にしろ天啓論にしろあらゆる秘伝的光に背を向けることとなる。

ところで，認識方法としても思考の対象としても非理性的なものを疑うことは，二重の意味において象徴に発見手段を禁じることである。従って，ヴィニーが用いている象徴は専ら表現手段としてに限られる。彼は idées に着せる衣裳として象徴を用いる。『日記』の随所に繰り返し述べられているように，彼の象徴はIdéeの証拠であり，例であり，証明なのである。idées は遠大であり深遠であるとしても，常に明確であり何ら難解なものを含んではいない。『狼の死』や『海に投げられた瓶』の中で提示されている問題は容易に理解される。一方，象徴として用いられている部分は，提示されている問題と密接な関係で結ばれており，そこに不可解な要素が介在してくることはない。

こうしたヴィニーの象徴主義を，ピエール・モローは，ヴィニーの中にみられる二つの

相反する思考過程を援用して，説明している。[3]先ず，初期作品において，ヴィニーは対象からidéeへと上昇する。人物であれ出来事であれ，ヴィニーは何らかの理由で己を魅了する日常的な世界から出発して，その裏に己のIdéeを発見しようとする。『サン・マール』の序文で〈Idéeが全てである。固有名詞はidéeの例および証拠以外の何ものでもない〉（C.M.25）と言う通り，彼にとって，〈この世に生きて活躍した人間は永遠のidéesの影であり典型にしか過ぎない〉のである。模索は続けられるが，この時点においては，未だ彼のidées は明確にはなっていない。他方，詩集『運命』期における彼の象徴主義は下降的である。既に明確になったidéeから出発して，彼はidéeに相応しい衣裳を探そうとする。衣裳は簡単に見つかるとは限らない。

教訓的な明瞭さを配慮して選ばれた「フルート」，「瓶」などの事物は，決してidéeに生き生きとした肉体を提供しているとは言い難い。エドモン・エステーヴが指摘しているように，ヴィニーの創り出す〈イメージは，肉体が魂に結びついているようにはidéeに結びついてはいない〉[4] のである。彼の象徴主義は教訓的な価値を持つとはいえ，いわゆる詩的な魅力に乏しいと言われる所以である。だが，実際，汎神論や天啓論を嫌うヴィニーには，事物の潜在的生命と詩人とを交渉させる共感的照応は無縁なのであり，彼における事物と詩人との照応はあくまでも人工的なのである。世界の一元的理解を認めるには彼は余りにも合理的であったと言わざるを得ない。

II

合理主義はヴィニーの願いであり信条であって，非理性的なものを排除しようとする彼の試みは果てしなく続くとしても，この試みは完全な形で成就されることはあり得ない。客観化を旨とする哲学者の理論の核に哲学者自身の性格，気質，偏見が見られるように，ヴィニーのIdées にも主観的要素が入り込んでくる。デカルト的光といえどもあらゆる影を一掃する訳にはゆかない。

ヴィニーは，死の直前に，自らの文学活動を回顧して『日記』に次のように記している。〈貴族に生れたので，私は貴族の，没落する貴族の追悼演説をした〔…〕詩人なので，私は為政者や大衆が詩人に対して抱いている不信感を指摘した〔…〕軍人として，私は〔…〕民衆や君主の政治的気粉れの犠牲となる闘士を描いた。私は知っていることを述べ，耐え忍んだところを語ったのである〉(J.1390—91)。この覚書は，ヴィニーが提起する問題は全て彼個人の苦しみに由来していることを示している。『軍隊の屈従と偉大』について考えてみれば，そもそも軍人は自らに課せられた任務を忠実に遂行すべきであって，けっして自らの屈従と偉大さについて瞑想すべきものではないであろう。ヴィニーが兵役を軽蔑し軍隊生活の不快を嘆くのは，彼が軍人には相応しくない感受性，すなわち，詩人の感受性を持っていたからに他ならない。『ダフネ』についても同様のことが言える。あらゆる予言者が不幸なのではない。物に動じない精神の持主であるアエティウス，カルヴァン，ヴ

ォルテールは成功しているのだから。ユリアヌス，メランヒトン，ルソーが失敗したのは，彼らの魂が余りにも繊細だったがためである。もしヴィニーが彼自身の個人的な体験や好みを一般化し，個々の問題において新しい視点を提起していれば，彼はもっと幅広い，いわば，哲学的な作品を作り上げたであろう。だが，彼は自分自身しか語らない。自らの軍隊観を全ての将校の問題として提起し，自らの予言者像を予言者のあるべき姿として提示する。〈個人に基づいてなされる精神的経験は大衆にも正当に適用し得る〉（J.1032）という確信のもとに，彼は自らの特殊な真実を万人に拡める道を選んでいるのである。従って，ヴィニーにおける根本思想は個人的なものであって公平なものとは言い難いのである。

実際，ヴィニーは，如何に己れの idées が精神の非理性的なものの性質を享けているか，〈正しきIdéeは如何に多くの夢想から成り立っているか〉(J.1050) を，自ら告白している。Idéeは詩人の全ての活動を結合しているのであり，〈詩人自身に由来するあらゆるものから作られている〉(J.1178) のである。知的であると同時に感情的な産物なのである。とりわけ，感性が優位を占めていると思われる面をここでは強調しておきたい。〈生活の諸様相を見ることによって，憤慨という激しい感情がダンテの心の中に湧きあがる。こうした感情から生れた一つのidéeが提起される〉(J.1191)。idéeは〈心を激しくときめかせ，「正義」と「愛」，「憐憫」と「犠牲」という崇高な感情をそこに刻みつける〉(J.1306)。一般に女性は男性に比して感情的な存在であると言われるが，ヴィニー自身〈私は生れつき女性的な感受性に恵まれていた〉（J.986）と『日記』の中で自己分析している。ノワール博士（ヴィニーの知性の分身）の忠告を必要としながら同時に冷徹な忠告を恐れるステロ（感情の分身）の気持を，ヴィニーは〈ひとりの女性が主人の意見を期待しながら同時に相談することを避けたいと考えている〉（D.278）という比喩で説明している。ステロならずともヴィニーにとって，思想は感情から生れる。彼の Idées は見かけほど，また，華々しく表明されるほど客観的でも一般的でもない。その本質は個人的であり，感情的なのである。

このことは最も抽象的な概念についても言えることである。プラトン哲学の体系においては，人間は特殊な事物の中に一般的な典型の例を認めるのだという考え方を説明するために，例えば，全ての馬は，個々の相違にもかかわらず，「馬」の原型に従属するとされる。人間の経験に先立つこうした典型の存在を説明するために，プラトンは，前世なるものを公準として提起し，そこで我々人間が典型を，Idées（イデア）を見，それを今想起するのだと考える。ヴィニーも，『ダフネ』，『牧人の家』，『神託』の中で，イデアのようなものの存在を認め，「美」，「愛」，「理性」，「正義」という風に，抽象的な概念を大文字で表記している。彼が『日記』に次のように記しているのを見れば，確かに彼はプラトンを頭に置いていたと言えるだろう。

「善」と「太陽」は世界の二つの王だ　一方は魂を支配し他方は肉体を支配する
(J.1285)

だが，ヴィニーは認識論としてのプラトン哲学をそのまま採用している訳ではない。彼のIdées は，プラトンの体系から切り離され，世界の説明のためではなく自己の信条の表明のために用いられている。Idées は形而上学的な実在ではなく心理学的な実在である。「名誉」，「憐憫」，「正義」等の概念は超越的な存在ではなく，人間によって生み出されるものである。それらは人間を精神化し文明化する性質を持つものであり，長い歳月を通して序々に磨き上げられるものである。従ってまた，常に亡び去る危険性を孕んでいるものでもある。

この世にこうしたIdées 以上に貴重で美しいものはあるだろうか。プラトンが賦与していない意味を与えられたこのIdées は，ヴィニーにとって，人生における憧れを満たし得る偶像だったのであり，彼は想像力を満足させるために自らのIdées を信じたのである。彼は詩作の豊饒な泉としてIdéesを熱烈に愛したのである。従って，Idéesは，ヴィニーにとって，何よりもまず官能的な魅力を持っていた，と言わねばならない。Idées と一緒に過す〈喜びは，女性の腕の中で我々を酔わせる肉体的快楽より数段優っている〉(J.888)。〈Idées に対する熱情よ，お前は私を何処に連れて行くのか。私は斯く斯くのIdée を持った。また別のIdée と共に多くの夜を過した〔…〕魂の喜びは長く続く。精神的恍惚は肉体的恍惚に優るものなのだ〉(J.1008)。ヴィニーがIdées を女神と崇めるのは以上のような熱狂さのゆえであり，もはや理性の関知し得るところではない。

Ⅲ

知性の子であると同時に心情の子であるIdées は，ヴィニーにとって，〈知的で美しい「真実」〉(C.M.21) である。この「真実」は〈人生そのものよりも美しい人生の魔法の鏡〉(J.1274) となる。これをヴィニーがIdées と呼ぶのは，idée という語がその知的な響きによって堅固さ，首尾一貫性，明白さを含んでいるからであり，また，彼がこれを人生そのものの混沌さに対比させようとしているためである。〈想像力は私を魅惑的で，かつ，あり得ない架空の世界に連れてゆく〉(J.1221)。〈架空の世界〉たるIdées は実現されることが〈あり得ない〉がゆえに空しいものかも知れないけれども，詩人の願望に真の満足を提供し得る唯一のものであるがゆえに，ヴィニーにとって，まさしく真実なのである。

Idées はヴィニー自身しか表していないが，ヴィニーの全てを表している。これは彼の美学の基礎であり，この点に関して，彼は『日記』に次のように記している。〈斜視であれ近視であれ，自分の目でものを見て欲しい〔…〕或る人が見る青は他の人の瞳に映る青と同じではない〔…〕めいめいは自分流に描いて欲しい〉(J.1031)。この言葉は他人に伝達できないものの模索の勧めではなく，創造に関して自分固有の視点を見い出すことの重要さを指摘したものである。個人の視点とは何か。ヴィニーはそれをその人間の性格だと規定する。〈性格はその男の魂を確実な線上に保つ。従って，文体とは真に人間の性格そのものである〉(J.1184)。こうしてヴィニーのIdées は彼の文体そのものとなり，彼の思考，感

情，性格の純粋な表現，結局は彼の存在全体の表現となる。

ヴィニーが宇宙や神の謎にそれ程関心を示さなかったのは，自らの注意を自己認識に当てたかったからである。象牙の塔の詩人と評されるように世間との接触をあまり好まなかったのは，真の独自性は自己の奥底にあると感じていたからである。〈奥底の窺える作家ほど稀なものはない。そうした作家は最も偉大である〔…〕モンテーニュの奥底，とりわけ，パスカルの奥底は窺える。神と人間，権威と自由，そして，決然と自らの天分と信仰との間に没頭したパスカルの姿が〉(J.975)。この先達の偉大さは多くの労苦の賜であることを承知していたとはいえ，子供の頃から自己分析癖のあったヴィニーは〈自己の奥底に自らの霊感の泉を探す必要性〉(J.936) を感じ，それに専心してきた。『ダフネ』の中でステロはノワール博士に言う：〈僕に悲しみを見つけて下さい。僕は痛く感動してこの悲しみのことを考えてみます。僕に幸せを下さい。僕はこの幸せのことを考え，これに打ち込み，これに精を出し，これを穿ち，代数を解くようにこれを検討してみます〉(D.278)。〈独りになったら，君の魂の奥底に降りてみ給え。君は，最下段のところに座って前から君を待っている「荘重さ」に出会うだろう〉(J.1008) という忠告は，ヴィニーが作品に与えている意味を我々によく示すものである。〈不朽の作品〉(J.1359) は自己の奥底から生れる。

しかし，心の奥底に在るものが知性によって完全に明確化されることはあり得ない。自意識の中には表現し難い感情が含まれている。ここで再度象徴主義が姿を現す。もはや表現の飾りとしてではなく発見手段として（勿論ヴィニーが求める背後の世界は超自然的でも神がかってもいず，あくまでも人間的なものだが)。Idées は知性によって捉えられ形を与えられたものだが，その一つ一つには不明確なものが包含されている。この不明確な部分は論理に従わないがゆえに，それを捉えるためには，イメージは明確であることを放棄せざるを得ない。従って，ヴィニーには二つの象徴主義が認められる。一つは，上述したように，何ら不可解な要素を持たない Idées を提起する象徴主義であり，もう一つは，彼自身の奥底にある捉え難いものを捕えようとする，より深くより曖昧な象徴主義である。ヴィニーは，こうした二つの象徴主義によって発見され表現される自らの Idées，自らの詩を，「真珠」という比喩で的確に表している。

詩よ，おお，宝よ，思考の真珠よ，
心のざわめきは，海のそれのように，
妨げはできないだろう，お前の陰影ある衣が，
お前を形作るべき色彩を集めるのを。

(La Maison du Berger V.134—137)

「思考」たる真珠の核は，「心のざわめき」たる小波によって潤色され，歳月を経て，見

事な宝石となって光り輝く。

だが，真珠の核は明確であるとしても，真珠の表面の潤色作用はどのように言語化されるのであろうか。心の奥底の捉え難い地帯は如何なる言語で表現されるのであろうか。言語の持つ論理性に頼れないイメージは，類推という，いわば，近似的な言語に頼らざるを得ないと思われる。実際，例えば，『海に投げられた瓶』の細部の描写において，数々のあり得ない事実が研究家によって指摘されている。なぜ遭難船が小さな輪を描くのか。なぜ瓶に入れられているものは紙に書かれたメモであるのに植物から抽出された精であるのか，等々。[5] これら全てをヴィニーの無知に基づく誤謬に帰すよりは，これらこそが表現し難いものを表すためにヴィニーが用いた象徴的言語であると考えるべきであろう。こうした言語の解読を通してヴィニーの感情が明らかになり，感情から生れるIdées がその全貌を現すのである。[6]

注

1) ヴィニーの作品からの引用は，ほとんど全て，*Œuvres complètes d'Alfred de Vigny*, éd. de la Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, tome Ⅰ(1950), tome Ⅱ(1948)によった。『ステロ』(*Stello*—St.と略す) はtome Ⅰに，『サン・マール』(*Cinq-Mars*—C.M.)，『日記』(*Le Journal*—J.) はtome Ⅱに収められている。数字は頁数を示す。ただし，『ダフネ』(*Daphné*—D.) については，A. de Vigny, *Stello Daphné*, Editions Garnier Frères, 1970.によった。
2) Jean Sangnier, *Mémoires inédits, fragments et projets d'Alfred de Vigny*, Gallimard, 1958. p.70.
3) Pierre Moreau, *Les Destinées de Vigny*, Sfelt, 1946. p.159sqq.
4) Edmond Estève, *Alfred de Vigny, sa pensée et son art*, Librairie Garnier Frères, 1923. p.239.
5) Pierre Moreau, op. cit., p.164.
6) 小論を物すに当っては，ヴィニーの想像力研究の大著：François Germain, *L'Imagination d'Alfred de Vigny*, José Corti, 1961.を大いに参考にさせていただいた。また，ヴィニーの宗教思想に関しては，Georges Bonnefoy, *La Pensée religieuse et morale d'Alfred de Vigny*, Hachette, 1944, Slatkine Reprints, 1971，およびJoseph Sungolowsky, *Vigny et le dix-huitième siècle*, Nizet, 1968.を参考にさせていただいた。

(D. 43　大阪教育大学助教授)